

台湾台中市大雅区の菜市場の展開

山下 昭 洋*

キーワード：台中、大雅区、公有零售市場、菜市场、攤

1. はしがき

「菜市场」¹⁾とは台湾伝統的な朝市のことであり、現在でも台湾の各所では、ほぼ毎朝、この菜市场がたっている。これら菜市场は、特に台湾各地の区・郷・鎮²⁾の中心市街地、もしくはそれに近い場所に立地していることが多い。すなわち、菜市场の調査は台湾の都市機能を探る上で重要なアイテムの一つであるといえる。

現在筆者は、台湾の台中市における都市構造の研究をおこなっており、2018年3月の「地理環境研究」(第20号)にて「日本統治前の台湾台中盆地における大雅の市街地形成」というテーマで、主に清朝時代を中心に、大雅区の市街地が形成される前までの過程を論じた。そこで、今回の論文では大雅区内に集落が形成され始めてから、中心市街地を形成していった要因の一つが「市場」だと仮定し検証することとした。しかし、台湾の生活空間の中には何種類かの市が存在している。例えば、朝開かれる「菜市场（朝市）」、夕方開かれる「黄昏市場」、夜開かれる「夜市」などである。台湾では生活において、それぞれの市場の利用方法が少しずつ違っている。例えば、菜市场とは家庭で料理を作るための材料を毎朝調達

するための場所であり、黄昏市場とは早朝に菜市场に行けない家庭が夕方に料理の材料を調達する場所で、夜市とは料理をしない人が夕食を食べに行ったり娯楽を求めに行ったりする場所である。そこで、今回は大雅区民のいわば台所であり、生活に一番密着しているといえる「菜市场（朝市）」に焦点を当て、その形成過程と現状を調査し市街地形成にどの様に影響したかを研究することとする。

台湾の菜市场の研究は、林鈞祥（1976）が「臺北市菜市场零售服務分界與雷利氏零售引力法則之印證」で、台北市の菜市场の立地の位置関係についてライリーの法則³⁾を基にして研究している。大村肇（1981）は「台湾台中市における零售市場と夜市の構造」⁴⁾で、1979年～1981年の旧台中市内の公有零售市場（零售市場）内の店舗の商品種目とその立地を調査し、店舗立地のモデルを作成している。そこで、本論文の市場での販売物品の分類は、大村の論文を参考にしながら進めていくこととする。

台湾の零售市場は、政府中央機関である經濟部の「臺灣省零售市場管理規則」⁵⁾により管理、管轄されていたが、2010年4月7日に廃止された。現在は、地方自治体

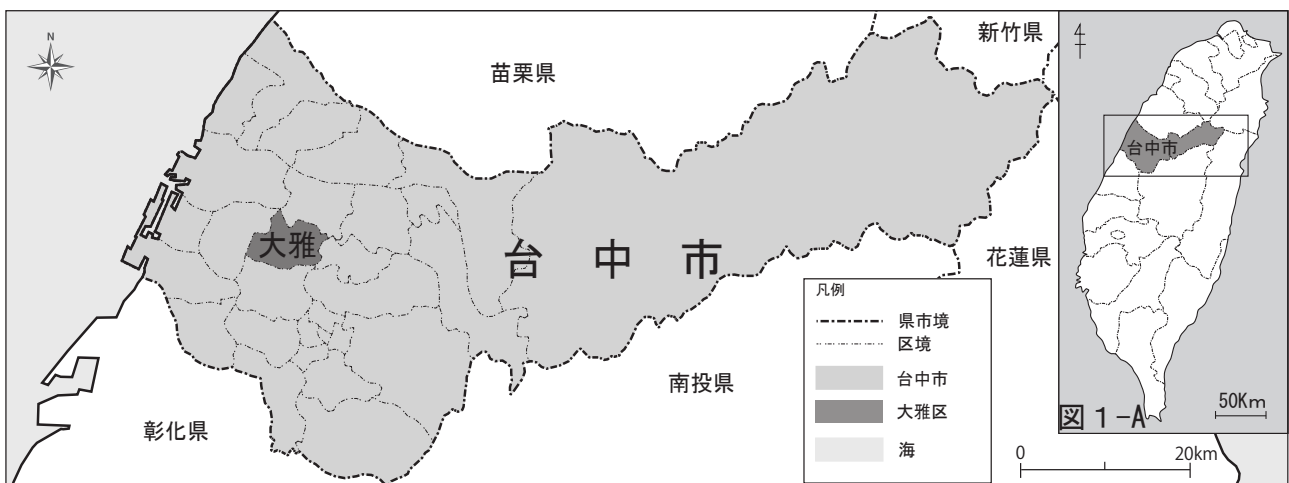


図1：台中市および大雅区位置図

参照：「台中市空間地図查詢系統」 作成：山下昭洋

* 静宜大学日本語文学科助理教授・立正大学環境科学研究所客員研究員

である各市県の経済発展局が零售市場を管理している。菜市場には自治体が管理する「公有零售市場（公有市場）」と、民営の「私有市場」がある⁶⁾。零售とは小売りという意味である。零售市場とは、店舗の大部分が施設（建物）内に設置されている市場（市場施設を含めたもの）を指して呼んでいる。しかし、本論文で調査した菜市場とは、零售市場を含めたその一円の「攤」（仮設店舗もしくはブースに近い）を含めた地域を含んでいることから、敢えて「菜市場」という言葉を使用することとした。また本論文では菜市場の形成に重要な要因となる大雅区における人口の変動も合わせて調査することとした。また、攤（tān）とは日本語の意味では「出店・売店・露店」の意味があるが、ここで使用している攤は、「仮設の店舗」や「ブース」に近い意味の店舗のことである。この他にも、攤の位置や攤が設置される場所のことを「攤位」（tānwèi）と呼び、毎日市場に攤を出すことを「擺攤」（bǎitān）と呼んでいる。

2. 大雅区の行政沿革と人口

菜市場を調査する前提として、菜市場が開かれるためには、そこで買い物をする購買客が必要である。購買客

とはすなわちそこに住む人間のことであり、そこで、大雅区には、いつ頃からどれ程の人間が居住していたのか把握するために、大雅区の暦年の人口の推移を再確認してみることにした。

大雅区の人口に関する研究論文には江素卿（2008）の『台中縣大雅鄉之人口成長與聚落發展』⁷⁾がある。この論文では大雅区の清朝時代から2016年までの現住人口や里別の人口、人口密度等を詳細に研究しているので、本論文でも江（2008）の論文を参考にしながら大雅区の行政の沿革と人口について論じることとする。

1) 大雅区の行政管轄の沿革

大雅区の人口を論じる上で、大雅区内の行政の範囲がどの様に変化したのか時系列に考察する必要がある。そこでまずは、大雅行政の区画の変遷を見てみることにする。現在の大雅区と呼ばれる行政範囲は、清朝統治時代から1920年（大正9）までは棟東下堡（サクトウカホウ）の一部であった。清朝時代には現在の区を中心地は、壩仔庄（pà-á）と呼ばれていた。現在の区の範囲は、壩仔庄および上員林庄、下員林庄、六張犁庄、十三寮庄、上横山庄、下横山庄、馬岡厝庄、四塊厝庄、大田心仔庄、員寶庄、花眉庄、頂楓樹脚庄の13庄（表1）であった。

表1 大雅区内の行政区画の変遷

清朝時代（～1895年）		日本統治時代（1895～1945年）						中華民國時代（1945～2018年）						
台灣縣		台中府			台中州			台中縣				台中市		
堡名	街庄名	支序名	堡名	街庄名	郡名	街庄名	大字	鄉鎮名	村名 1950年	村名 1966年	村名 1998年	村名 2006年	區名	里名 2010年
棟東下堡	壩仔庄	葫蘆墩支序	棟東下堡	埤雅街	豐原郡	大雅庄	大雅	大雅鄉	大雅村	大雅村	大雅村 文雅村 上雅村	大雅村 文雅村 上雅村	大雅區	大雅里 文雅里 上雅里
	上員林庄 下員林庄			上員林庄 下員林庄			上員林 下員林		員林村	員林村	員林村	員林村		員林里
	六張犁庄			六張犁庄 埔仔墘庄			六張犁 埔仔墘		六寶村	六寶村	六寶村	六寶村		六寶里
	十三寮庄 上橫山庄			十三寮庄 上橫山庄			十三寮 上橫山		秀山村	秀山村 忠義村	秀山村 忠義村	秀山村 忠義村		秀山村 忠義里
	下橫山庄			下橫山庄			下橫山		橫山村	橫山村	橫山村	橫山村		橫山里
	馬岡厝庄 四塊厝庄 大田心仔庄			馬岡厝庄 四塊厝庄 大田心庄			馬岡厝 四塊厝 大田心		三和村	三和村 四德村 二和村	三和村 四德村 二和村	三和里 四德里 二和里		
	員寶庄 花眉庄			西員寶庄 花眉庄			西員寶 花眉		西寶村	西寶村	西寶村	西寶村		西寶里
計	13庄			14街庄			14大字		8村	9村	13村	15村		15里
									上楓村	上楓村	上楓村	上楓村 雅楓村 大楓村		上楓里 雅楓里 大楓里

参照：清朝時代から2006年までは江素卿（2008）『台中縣大雅鄉之人口成長與聚落發展』の表3-1「大雅行政区沿革表」

2016年の数値は大雅区公所HP（最終閲覧日2018年11月24日）

作成：山下昭洋

日本統治時代に入ると中心は埤雅（グガ）街に、頂楓樹脚庄が上楓樹脚庄に、大田心仔庄が大田心庄と名称が変わり、六張犁庄から埔仔墘が分れ、1街13庄となった。その後、1920年の台湾総督府による地方官官制改正⁸⁾により、台中庁が台中州となり、日本式の州郡制が布かれることとなった。現在の大雅区は豊原郡大雅庄となり、区の行政範囲も現在のものと同一となった。また、1920年以前に使用されていた街庄は大字と変わった。この大雅庄時期の大字は14であった。

戦後の1950年からは中華民国により郷鎮里制が採用され、大雅郷（区）となった。大字の行政区画も廃止され、村里制となった。この時は、大雅郷全体の行政範囲は同

じであったが、六張犁と埔仔墘が再び統合され六寶村となり、上員林と下員林が合併し員林村となり、十三寮と上横山が横山村に、馬岡厝と四塊厝と大田心が三和村に、西員寶と花眉が西寶村となったことで合計8村となった。

その後、1966年に秀山村から、忠義村⁹⁾が分れ、1998年には大雅村が大雅村・上雅村・文雅村の3つに分かれ、三和村も三和村・四德村・二和村の3村に分かれた。2006年には上楓村が上楓村・雅楓村・大楓村の3つに分かれ、現在と同じ行政管轄となる15村体制となった。そして現在は、2010年に台中縣市が合併し直轄市となったことにより、郷から区となり、村も里と変わり15里の大雅区となっている。



図2：台中庁と棟東下堡位置図（1901～1909）

参照：「最新臺灣詳密地圖」（1907）
作成：山下昭洋

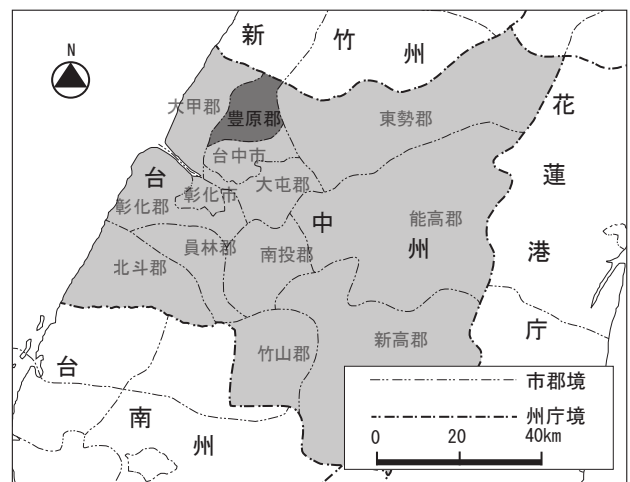


図3：台中州と豊原郡位置図

参照：「臺灣島全圖」（1939）
作成：山下昭洋

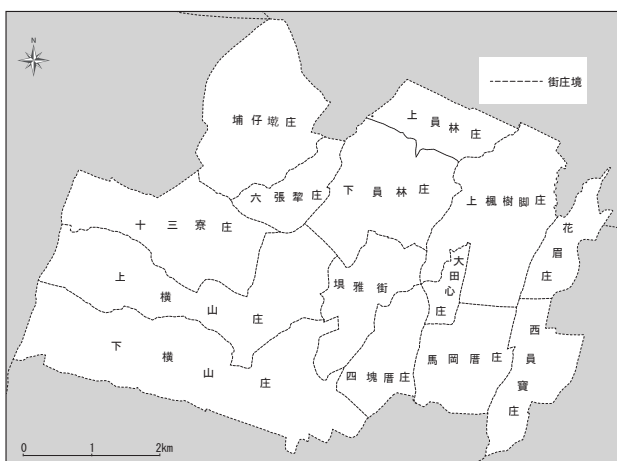


図4：1895～1920年までににおける
現在の大雅区範囲内の街庄図

参照：大雅区公所（2018）「大雅區都市計畫街道圖」
台湾総督府（1898）「台湾堡図」
作成：山下昭洋

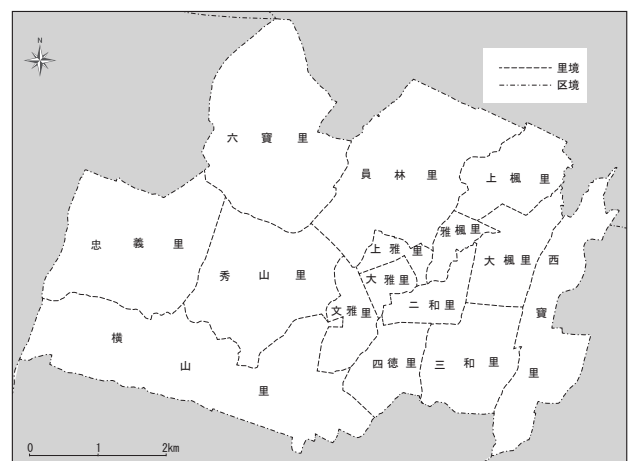


図5：大雅区内の里の位置図（2018年現在）

参照：大雅区公所（2018）「大雅區都市計畫街道圖」
作成：山下昭洋

2) 大雅区の人口の推移

①大雅区の総人口の推移

ここでは大雅区の総人口の推移を見てみる。台湾でのセンサスは日本統治時代の1905年（明治38）に、台湾総督府によっておこなわれた「臨時台湾戸口調査」が嚆矢である。そこで、1905年から2015年までの大雅区の総人口の推移を5年間隔に区切って図6にした。図6と表2から1905年から昭和に入る1925年までの各期間の年間平均人口変動数は10～92人と2ケタ程度の成長であった。しかし、昭和期に入ると、1925～1940年までは台湾総督府によるインフラの整備も進んだことから、毎年200人台の増加となっている。

戦後は1949年からの中華民国国民党の遷台により、1950～1960年の年平均人口変動数は908.8人と大雅（区）の総人口が急増していることがわかる。これは、特に現在の忠義里に眷村（中国本土からの移住民の村）ができたことによるものが大きな要因であると考えられる。

その後、台湾の経済の発展と共に大雅区の人口は増加していくが、1970～1975年は一時人口の増加が鈍った。これは、旧台中市の都心の都市化によりそこへ人口の集中が起きたためであると江（2008）は分析している。しかし、著者は都市部へ人口が流出した原因には、1973年に蔣経国（当時は行政院長）が打ち立てた「十大建設」¹⁰⁾により農村からインフラ整備地へ一時的に労働人口が流れたためではないかと考えている。この計画によ

り、1976年に台中港が完成し、1978年には国道一号線（台湾縦貫高速道路）が開通し、大雅インターチェンジができる。これにより1980年代に入って、大雅（区）の利便性が増したことにより、大雅区の総人口は激増したと考えている。

近年では2003年に、大雅区の横山里を含む466haの土地に中部科学園區（台中サイエンスパーク）が建設されて、人口増加が見込まれていたが、中国大陆の経済に影響され大雅区内でも物価や地価が高騰¹¹⁾したことにより、大雅区の総人口の増加はやや鈍っている。

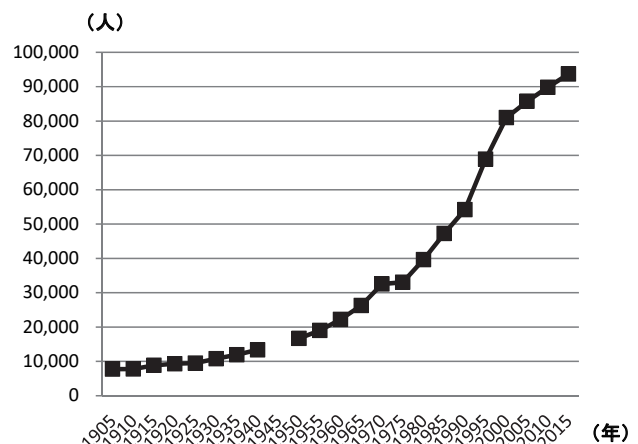


図6：大雅区の総人口の推移（1905～2015年）

参照：台湾総督府 『台湾現住人口統計』
『台湾常住人口統計』

作成：山下昭洋

表2：日本統治時代における大雅庄の街庄別人口変動

街庄名	1897年3月 人口(人)	1905年人口 (人)	1897～1905 年間の 年平均人口 変動数(人)	1897～1905 年間の 年平均人口 変動率(%)	1915年人口 (人)	1905～1915 年間の 年平均人口 変動数(人)	1905～1915 年間の 年平均人口 変動率(%)	1925年人口 (人)	1915～1925 年間の 年平均人口 変動数(人)	1915～1925 年間の 年平均人口 変動率(%)	1935年人口 (人)	1925～1935 年間の 年平均人口 変動数(人)	1925～1935 年間の 年平均人口 変動率(%)
埧雅街	741	873	16.5	2.23	891	1.8	2.06	953	6.2	6.96	1,541	58.8	61.70
四塊厝庄	407	389	-2.3	-0.57	415	2.6	6.68	465	5	12.05	499	3.4	7.31
上楓樹脚庄	908	1,138	28.8	3.17	1,404	26.6	23.37	1,438	3.4	2.42	1,769	33.1	23.02
上員林庄	336	437	12.6	3.75	465	2.8	6.41	554	8.9	19.14	666	11.2	20.22
下員林庄	696	802	13.3	1.91	948	14.6	18.20	1,089	14.1	14.87	1,299	21	19.28
埔仔墘庄	182	213	3.9	2.14	371	15.8	74.18	471	10	26.95	683	21.2	45.01
六張犁庄	207	207	0	0	259	5.2	25.12	245	-1.4	-5.41	316	7.1	28.98
十三寮庄	274	256	-2.3	-0.84	289	3.3	12.89	385	9.6	33.22	549	16.4	42.60
上横山庄	693	715	2.8	0.40	782	6.7	9.37	717	-6.5	-8.31	799	8.2	11.44
下横山庄	722	855	16.6	2.30	1,068	21.3	24.91	1,143	7.5	7.02	1,442	29.2	25.55
花眉庄	436	475	4.9	1.12	493	1.8	3.79	521	2.8	5.68	663	14.2	27.26
大田心仔庄	129	146	2.1	1.63	149	0.3	2.05	157	0.8	5.37	170	1.3	8.28
馬岡厝庄	634	677	5.4	0.85	676	-0.1	-0.15	698	2.2	3.25	821	12.3	17.62
西員寶庄	553	558	0.6	0.11	654	9.6	17.20	665	1.1	1.68	740	7.5	11.28
大雅庄	6,918	7,741	102.9	1.49	8,864	112.3	14.51	9,501	63.7	7.19	11,957	245.6	25.85

参照：1897年『台湾事情一斑』、1905年、1915年、1925年『台湾現住人口統計』、1935年『台湾常住戸口統計』

1897年は3月、1905年、1915年、1925年は10月1日現在、1935年は12月末日、街庄の順は『台湾現住人口統計』による。

作成：山下昭洋

②大雅区の里別人口推移

次に各里別の人口の推移を見てみることにする。

台湾全土でおこなわれた最初の里（街庄）別単位の人口調査は、台湾事務局編纂による1897年（明治30）の『台湾事情一斑』に収録されている「戸口」に掲載されているものが嚆矢である。当時の大雅（区）は、棟東下堡¹²⁾（サクトウカホウ）の一部に含まれていた。表2は日本統治時代の棟東下堡内の現在の大雅区に相当する埧雅街、四塊厝庄、上楓樹脚庄、上員林庄、下員林庄、埔仔墘庄、六張犁庄、十三寮庄、上横山庄、下横山庄、花眉庄、大田心仔庄、馬厝厝庄、西員寶庄の14街庄の人口の推移を示したものである。表2から日本統治時代の前期の1915年頃までは、大雅（区）の人口は、埧雅街の北

部の庄（上楓樹脚、埔仔墘、六張犁、下員林）での人口増加数が多いのがわかる。1925年以降の昭和期に入ると地域の全体的な増加がみられるが、特に埧雅街の増加が著しい。これは、周辺の庄の人口が増加したことで、埧雅街に人口が集中し始めて、市街の形成が加速し始めたからだと推察される。

次に戦後の1946～2016年までの大雅区内の人口の推移と、人口密度を10年間隔で表3と図7にあらわした。この図表は1946～2006年までを江（2008）の論文を参考にした¹³⁾。2016年は、江（2008）と年を合致させるために、台中市人口統計のHPの資料から2016年12月の人口を使用することとした¹⁴⁾。

表3：戦後における大雅区(郷)の里(村)別人口変動（1946～2016年）

里(村)名	1946年人口 (人)	1957年人口 (人)	1946～1957 年間の 年平均人口 変動数(人)	1946～1957 年間の 年平均人口 変動率(%)	1966年人口 (人)	1957～1966 年間の 年平均人口 変動数(人)	1957～1966 年間の 年平均人口 変動率(%)	1976年人口 (人)	1966～1976 年間の 年平均人口 変動数(人)	1966～1976 年間の 年平均人口 変動率(%)	1986年人口 (人)	1976～1986 年間の 年平均人口 変動数(人)	1976～1986 年間の 年平均人口 変動率(%)
大雅里	1,758	2,620	73.4	4.18	3,432	90.2	3.44	5,125	169.3	4.93	10,492	536.7	10.47
上雅里													
文雅里													
員林里	2,450	3,219	70	2.86	3,829	61.0	1.90	4,285	45.6	1.19	5,188	90.3	2.11
六寶里	1,173	1,685	46.5	3.96	2,649	107.1	6.36	4,246	159.7	6.03	6,569	232.3	5.47
秀山里	1,507	3,102	145	9.62	2,780	*1 286.2	*1 9.23	3,096	31.6	1.14	3,291	19.5	0.63
忠義里					2,898			4,236	133.8	4.62	3,923	-31.3	-0.74
横山里	1,559	2,074	46.8	3.00	2,493			2,899	40.6	1.63	3,325	42.6	1.47
三和里	1,750	2,584	75.8	4.33	3,773	132.1	5.11	4,210	43.7	1.16	6,602	239.2	5.68
四德里													
二和里													
西寶里	1,653	2,020	33.4	2.02	2,594	63.8	3.16	2,645	5.1	0.20	2,722	7.7	0.29
上楓里	1,978	2,457	43.5	2.20	2,752	32.8	1.34	3,270	51.8	1.88	6,314	304.4	9.31
雅楓里													
大楓里													
大雅区	13,828	19,761	539.4	3.90	27,200	830.2	4.20	34,012	681.2	2.50	48,426	1,441.4	4.24
	1996年人口 (人)	1986～1996 年間の 年平均人口 変動数(人)	1986～1996 年間の 年平均人口 変動率(%)	2006年人口 (人)	1996～2006 年間の 年平均人口 変動数(人)	1996～2006 年間の 年平均人口 変動率(%)	2016年人口 (人)	2006～2016 年間の 年平均人口 変動数(人)	2006～2016 年間の 年平均人口 変動率(%)	*1 秀山村から忠義村が分れたため秀山村と忠義村をあわせた数で計算 *2 大雅村から文雅村と上雅村が分れたため大雅村と文雅村と上雅村をあわせた数で計算 *3 上楓村から雅楓村と大楓村が分れたため上楓村と雅楓村と大楓村をあわせた数で計算			
大雅里	16,408	591.6	5.64	5,472	*2 161.7	*2 0.99	5,313	-15.9	-0.29				
上雅里				5,695			7,258	156.3	2.74				
文雅里				6,858			7,227	36.9	0.54	里の順は大雅区公所の統計を基にしている。また、2010年の合併前は村であったが現在は里となっているので「里」で表記している。 参照：1946年～2006年までの人口は江素卿（2008）『台中縣大雅郷之人口成長與聚落發展』の表5-2「光復後大雅郷各時期各村之人口數」 2016年の数値は大雅区公所HPから2016年12月末日の数値（最終閲覧日：2018年11月24日） 作成：山下昭洋			
員林里	7,007	181.9	3.15	10,328	332.1	4.74	11,619	129.1	1.25				
六寶里	7,232	66.3	1.0	7,227	-0.5	-0.01	7,584	35.7	0.49				
秀山里	3,847	55.6	1.69	3,854	0.7	0.02	3,891	37	0.96				
忠義里	4,242	31.9	0.81	4,264	2	0.05	4,308	4.4	0.10				
横山里	4,182	85.7	2.58	4,637	45.5	1.09	5,197	56	1.21				
三和里	12,535	593.3	8.99	5,702	*3 478.5	*3 3.82	6,513	81.1	1.42				
四德里				5,470			5,660	19	0.35				
二和里				6,148			7,353	120.5	1.96				
西寶里	3,743	102.1	3.75	5,043	130	3.47	5,905	86.2	1.71				
上楓里	12,680	636.6	10.08	6,537	361.5	2.85	7,546	100.9	1.54				
雅楓里				4,352			4,440	8.8	0.20				
大楓里				5,406			5,889	48.3	0.89				
大雅区	71,876	2345.0	4.84	86,993	1511.7	2.10	95,703	871	1.00				



図7：大雅区の人口密度の推移（1946～2016年）

参照：1946年～2006年までの人口は江素卿（2008）『台中縣大雅鄉之人口成長與聚落發展』の表5-2「光復後大雅鄉各時期各村之人口數」

2016年の数値は大雅区公所HPから2016年12月末日の数値（最終閲覧日：2018年11月24日）

作成：山下昭洋

戦後の大雅郷（区）は大雅村、員林村、六寶村、秀山村、横山村、三和村、西寶村、上楓村の8村（里）から始まっている。1946年に最も人口が多かった村（里）は員林村（里）で、2,450人で、次いで上楓村（里）の1,978人、3番目が大雅村（里）の1,758人であった。しかし、同年の人口密度を見てみると大雅村が1,063人/km²で最も高く、次いで西寶村が630人/km²（当時西寶村は馬岡厝が含まれていた）、そして上楓村592人/km²、員林村587人/km²となっていた。人口密度では大雅村が西寶村の1.7倍も多かった。同年のその他の村の人口密度は200~600人/km²程度であったことを考えても、大雅村の人口密度の高さが目立っている。また、この年は大雅村を中心に北東部の村で人口、人口密度が共に多かったことがわかった。

1957~1966年の9年間は大雅区の総人口でも年平均人口変動率が最も高い4.80%であった。また前述したように、この時期には中国大陆からの移住者が秀山村の眷村に居住し始めたため、秀山村から忠義村が分離している。因みに忠義村のこの9年間の年平均人口増加数は286.2人で、平均人口変動率で見ても9.23%と他村を大きく上回っている。その後、1966~1976年の区全体の年平均人口増加率は2.50%と伸び悩んでいる。これは大雅区の総人口の推移図からも見て取れ、その原因は前述している。

1976年以降は、特に大雅村の人口増加が顕著となり1976~1996年までは毎年500人以上増加となっている。人口の急激な増加により1998年に大雅村から上雅村と文雅村が分離した。2016年には大雅里は人口密度13,293人と人口過密状態となり、人口が減少している。しかし、上雅里には2018年11月現在でも新たなマンションが建設されており、人口は増加中である。また、2006年以降は大雅区の総人口の年平均人口変動率も1%となり伸びが鈍ったが、これは台湾全体の少子化の影響（2003年以降の合計特殊出生率は1.20を割り込んでいる）¹⁵⁾と、2003年に中部科技園区が秀山里、横山里に建設されたことと中国大陆経済の影響により、地価が高騰し住宅の値段が高騰したことが要因として考えられる。

3. 大雅菜市場の変遷

2018年に大雅区公所から発行された「大雅区都市計畫街道圖」を基に2018年11月現在の大雅区の諸機能の配置を見てみると（図8）、大雅区公所（区役所）や大雅戸政事務所（戸籍を取扱う役所）といった区の行政機能は雅環路の沿いの上雅里に位置している。しかし、区公所

が設定している商業区は省道10号（民生路）以南、台中市道86号線以北、省道1号乙線以東、学府路以西の範囲内となっている。区公所が規定した住宅地はこの商業区の外周を取り囲んでおり、商業区を取り囲むように建設された雅環路を中心に、南北は雅環路の内側、東は森林南路以西、西は中山北路以東が住宅地となっている。大雅区の最も新しい工業区は、横山里と秀山里にまたがる中部科技園区（台中サイエンスパーク）であるが、比較的小規模な工業区が大雅区の住宅地の外側に、東側には省道10号線沿いと市道86号線沿いに、南側には省道1号乙線沿いにそれぞれ立地している。

以上のことから判断すると、この大雅区公所が指定している商業区が区を中心地となるであろう。このエリアは大雅里の西半分を占めており、警察署、保健所、郵便局、農協、活動センター、銀行等の諸機能が集中している。銀行は大雅区内に14か所もあるが、その中の半数の7行がこのエリア内に集中している。また、大雅区民の宗教的中心となっている永興宮もここに立地している。今回調査した大雅菜市場は永興宮（図8中の㊤）を中心に立地している。

1) 永興宮の建立

台湾の民間信仰と言われているのは道教であるが、大雅区民の宗教的中心となっている廟宇が永興宮である。永興宮の建立は1850年（道光30）である。その縁起は1847年（道光27）に庄民の某家の祭壇で祀っていた天上聖母（媽祖）から始まった。この媽祖を祀ってからこの地に対して御利益が多かったため、張石養、張儒瑞、江天珠、江月蓋、張安然、頼文益、楊石等の勧めで現在地に建立したのが永興宮の始まりである。永興宮の媽祖は特に「老四媽」と呼ばれ、現在の台中市大肚区にある萬興宮（建：1736年）の「飛媽」と呼ばれる媽祖の分祀である。この永興宮の建立過程から推察すると、1847年には現在の大雅里周辺に、ある程度の集落が形成されていた可能性をうかがわせている。その後、この永興宮を中心に街が発展していくこととなる。

現在、永興宮の門前を南北に走る道路は大雅路であるが、現存する最古の商店は「朱慶春香舖」であり、1887年（光緒13）に開業している。初代店主の朱慶泉が永興宮の参拝者に線香を販売し始めたことに始まるが、現在でもこの店舗では「お香」を製造販売している。この様に初期の大雅路は永興宮を中心にして、その周辺に集落、或は店舗が立地することによって形成されていった。



図8：大雅区中心市街地と諸機能の分布図

参照：大雅区公所（2018）『大雅區都市計劃圖』

作成：山下昭洋

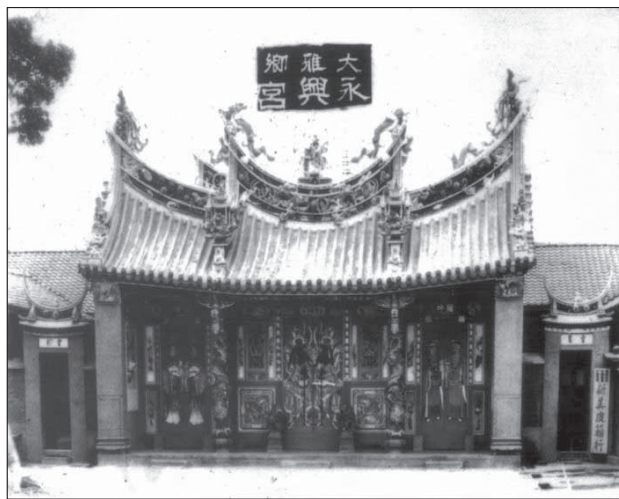


写真1：戦前の永興宮

出典：『看咱古早的大雅』

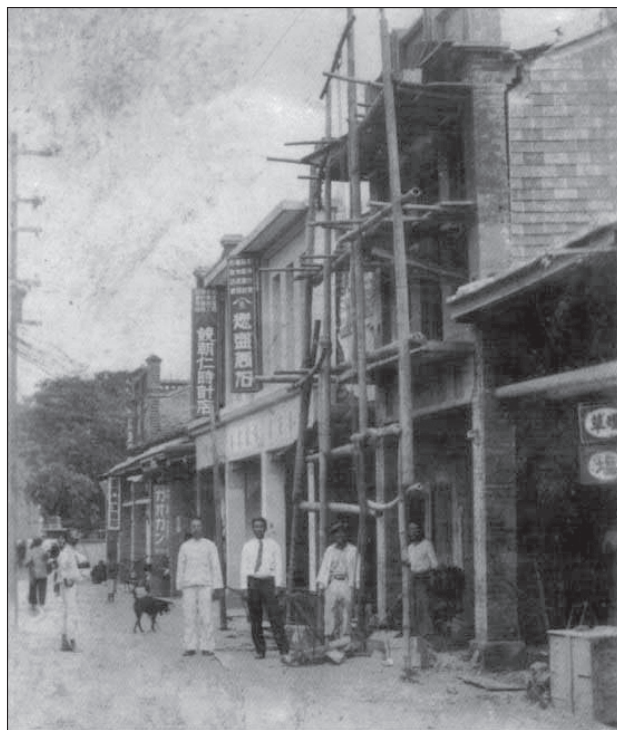


写真2：1935年の朱慶春香舖と大雅路
（奥の樹が生えている所が永興宮）

出典：『看咱古早的大雅』

2) 菜市場の形成

大雅区の歴史や沿革を記した文献としては陳炎正主編(1995)『大雅郷志』や陳東閣(1995)『永興宮志』、陳(2000)『看咱古早的大雅』等があるが、大雅区内の菜市场については一切触れられていない。これは菜市场が決まった店舗を持たず、「攤」と呼ばれる仮設店舗（ブース）の営業日（時間）も不定期的なため、公的な資料も存在していないことによるだろう。

そこで、筆者は大雅区に長期に在住している住人、もしくは菜市场で営業している店主等に対して聞き取りを行い菜市场の形成過程を調査することにした。今回、聞き取りを行った人物は1945年生まれの元大雅区内中学校教員Lや、1986年から菜市场内で果菜類を販売している女性、同じく1994年から果菜類を販売している男性、2000年頃から魚介類を販売している女性に対して直接インタビューをおこなった。その他、1953年に大雅区で生まれ育ち、現在はマンションの管理人をしているL等にもインタビューをおこなった。しかし、菜市场の攤には、非合法のものや、場所代の秘匿等に関わっているものもあるため、調査対象者の氏名や詳細な販売業種は伏せている。

大雅区で最初に市がたったのは、永興宮の北西に位置する図9中①の大雅路から学府路に抜ける斜線の範囲で、当時は大栄街（現在：学府路291巷）と呼ばれていた路地であった。これは元教員のLから聞き取った証言であるが、Lが幼いころに年長者から聞き伝えたことであるが、毎朝、梧棲港（現在の台中港の一部）から魚を運び、ここで売り始めたことから菜市场が始まったとのことで、この魚売りのことを当時は台湾語で「海口人（ハイコウラン）」と呼んでいたとのことである。大栄街から菜市场が始まったという証言は、複数の人からの証言でも確認できている。ただし、販売していた物品まで記憶していたのはLのみであった。当時、この地で魚介の販売が開始された理由は、大雅区は、戦前の期間には上質の米収穫できる有名な農村であったからだと考えられる。当時の住民はほとんどが農業従事者で、米や野菜や肉類（鳥・豚）は自給できる状態であったが、海からの魚介類は手に入れるのが困難であったはずである。そこで、それに商機を感じた「海口人」がここで魚の販売を始めたからだと著者は推測している。事実、大雅里から南東に約1kmに位置する馬岡厝は、清朝時代には港から大墩街（台中市中区）まで塩を運ぶ経由地として使用されていて、当時すでに道が整備されて、港から大雅までは直線でも15km程しか離れていない。このことから、

当時の大雅区で海産物が販売されていたとしても不自然ではない。因みに馬岡厝の地名はこの塩を守るために、清朝時代にこの地に軍事拠点を設営し馬を置いていたことから「馬岡厝」となったと言われている。

大栄街に魚介類販売の「攤」ができると、徐々にその販売品目と攤の数も増加していき、やがて大栄街から溢れ大雅街へと菜市场が拡大していった。正確な年月は不詳だが、日本統治時代の昭和期頃には大雅街の大栄街から現在の民興街の範囲が、この時期の菜市场の図9中②の範囲であった。不思議なことに、廟口を避けるように市が立っており、門前には攤は無かったとのことである。当時はこの区画にすでに商店街ができており、早朝の時間に商店街の店舗の前に攤が置かれ、昼ごろになると攤は撤去された。攤以外の商店街の店舗の営業品目は調査中であるが、当時の台湾では商品販売において専門店はほとんど見られなかったことから食品雑貨、物品雑貨店ばかりであったとのことである。

この様に戦前と戦後間もなくの間の大雅菜市场は①と②、特に②の範囲を中心に菜市场が立地していたことが確認された。

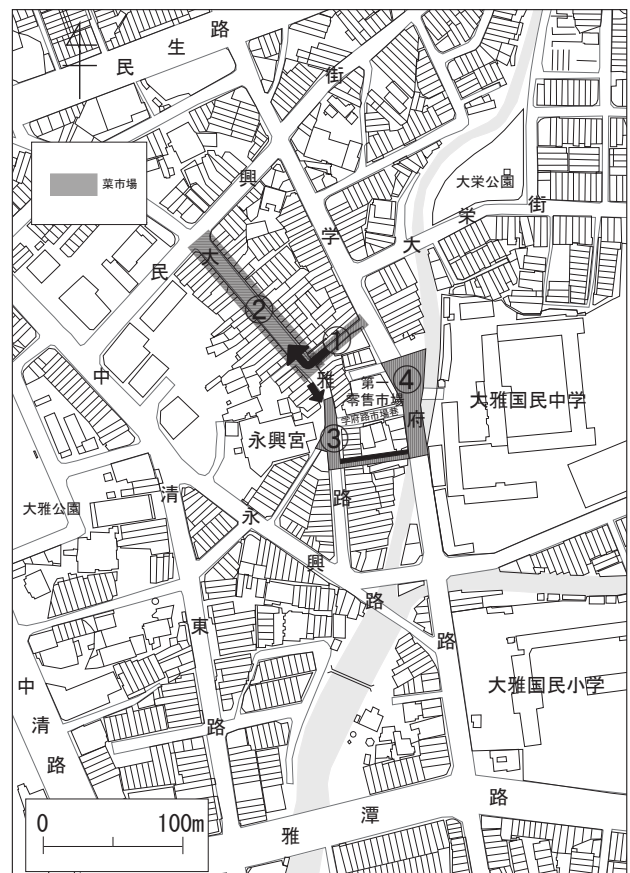


図9：零售市場建設前の大雅菜市场の展開図

参照：「臺中市空間地圖查詢系統」
作成：山下昭洋

3) 八七水災後の菜市場

1959年8月7日台湾中南部を大水害が襲った。この大水害を台湾では「八七水災」と呼んでいる。台湾歴史学会HPの「八七水災」のページによると、8月2日に西太平洋上で発生した台風6号（ELLEN：艾倫）が台湾付近を通過した際、南シナ海上に発生していた熱帯低気圧を刺激し、台湾中南部に記録的大雨を降らせた水害である。当時、台湾の13県市で、大雨が降り、特に苗栗、台中、南投、彰化、雲林、嘉義の6県と、台中市で被害が大きく、その中でも特に酷かったのが苗栗、豊原（台中）、芬園（彰化）、烏溪上流（南投）、斗六（雲林）、阿里山（嘉義）であった。この水害で667人が死亡、408人が行方不明になり、942人が負傷し、およそ30万人が被災した¹⁶⁾。

豊原市（区）と隣接する大雅郷（区）も水害に見舞われ、筏子溪の支流になる土地公汴（汴とは人工水路）が氾濫し大雅路の市街地に流れ込んだ。大雅の市街地に建てられていた当時民間の建物は古くからの1.5階建て（1階は店舗兼住居、2階は倉庫）の建物が多かったこと、また、材料が泥製の煉瓦であったため、市街地の商店はこの洪水により溶けて全壊した。許（1998）『台中縣豊原區古蹟巡禮暨史料彙編』によると永興宮も建物内部の4尺（120cm）まで浸水した¹⁷⁾。そしてこの水害によって大雅菜市場は一時断絶したのである。

その後、商店の再建が始まるが、大雅路（商店街）では建物建築のため、擺攤（攤を並べ商品を販売すること）ができなくなったために、図9中③の永興宮の門前から三叉路上と戦前に小学校だった建物の壁際で菜市場が再開し始めた。現在の第一零售市場と学府路市場巷は1976年までは学校施設関係の建物が入っていた。この建物は1921年に大雅公学校（台湾人のための小学校）として煉瓦造りで建てられていた。そのため八七水災でも倒壊は無かった。その後、1936年までは公学校の校舎として使用されていたが、後に地域の集会所や、1961年から1年間は大雅国民中学の仮校舎として使用されていた。

ただし、この時期頃から攤による販売への警察の取り締まりが厳しくなったため、取り締まりがあると他の場所へ移動し、緩くなると戻ってくるといった「いたちごっこ」を繰り返す時期となった。特に1973年から実施された「大雅都市計画」によって学府路が建設されると、菜市場の攤は図9中④の学府路にも拡大することになる。学府路が開通すると、夜間には違法な夜市も立つようになった。

この時期は警察の取り締まりが日常的におこなわれて

いたとのことである。取り締まりがあると学府路側へ攤は移動し、緩くなると廟の門前や学校の屏際に戻ってきた。罰金を取られるのは、大変だったはずであるが、それでも菜市場は消滅していないので、それ以上の利益が上がっていたのは確かであるし、この場所から菜市場が全く違う場所へ移動もしていなかったところを見ると、この場所が地理的にも集客できていたということであろう。

4) 零售市場の建設と菜市場

1976年7月に大雅第一公有零售市場（第一零售市場）が、現在の場所（台中市大雅区大雅里大雅路50号）に建設された。開業時の第一零售市場では、一階で肉類や魚介類を中心とする生鮮食品が販売されていた。そして、二階で衣料品雑貨が販売されていて、三階は卓球などが行える娯楽施設であった。しかし、営業開始直後から市場の周辺の図10中⑤には第一零售市場には入らない攤位が設けられた。この原因は第一零售市場構内の面積には限界があったことと、攤位を設けると、毎月家賃を支払わなければならないことと、市場構内は屋内であるため狭く、客足が鈍かったためだとのことである。

その後、第一零售市場から場外への擺攤の拡大を抑えるため、1981年頃に大雅第二公有零售市場（台中市大雅区大雅里民生路一段194號）を開設したが、僅か2ヶ月で客足は途絶え、2年で第二零售市場は営業停止となったとのことである。2018年現在、第二零售市場には飲食店が入っているが、2019年には取壊され、新たに区の施設が建設されるとのことである。

その一方で、第一零售市場を中心にした大雅菜市場ではその後も攤が拡大していった。最も客足が多いのは零售市場と永興宮の門前の三叉路で、現在も攤位の値段が最も高い場所である。そこから、南西方向に走る大雅路⑥に先に擺攤が始まり、永興路の道路幅拡張に伴い1994年に角の生鮮販売店が永興路に攤位を広げたことから、永興路⑦に擺攤が始まった。次に2000年頃に、永興宮前の大雅路を真南に進んだ角から5件目に麵類を販売する図10中●の飲食店（現在は魚介類販売）ができたことにより、この大雅路通り⑧にも擺攤が並び始めた。ここの擺攤は主に学府路からの移動であるとのことである。現在は、この⑤⑥⑦⑧の範囲に客足が集中しているが、擺攤の拡大は進行中で、大雅路は学府路291巷の丁字路以南から学府路との三叉路に至り、永興路は、北は忠清東路の農協倉庫前から全通り、学府路は大栄路との丁字路から雅潭路までの範囲が2018年10月現在の擺攤の範囲となっている。



図10：零售市場建設後の大雅菜市場の展開図

参照：「臺中市空間地圖查詢系統」
作成：山下昭洋

4. 大雅菜市場の現況

大雅菜市場の現在の状況を営業時間、攤の種類、攤位の立地の3つに分けて調査した。その結果は以下の通りとなった。

1) 大雅菜市場の営業時間

台中市経済局が管理する大雅第一零售市場の営業時間は、公式には午前6時から午後1時までで、毎週月曜日が定休日となっている。しかし、実際には第一零售市場内の店舗でも、月曜日に営業している店舗もあることから、この営業時間とは市場建物内の事務所の営業時間と考えてよいだろう。

大雅菜市場の営業時間は、特定の管理者は存在していないから、基本的に営業時間は自由である。擺攤店主への聞き取り調査によると、営業開始時間が最も早いのが豚肉の攤位であった。豚肉の攤位では、午前3時ごろから準備と営業が開始されているとのことである。反対に、最も遅くまで営業しているのは果物販売で、果物の攤位は午後2時ごろまで営業している。その他の擺攤にはこ

れといった営業時間の決まりがなく、鮮魚類は魚が傷みやすいため早めの11時半頃には閉店している攤位がある。惣菜類や、雑貨類は遅い所では9時ごろから営業を開始する攤位もある。

また、雨天時には攤位の数も減少する。これは、菜市場のほとんどの攤位が屋外に設置されていることから、客足が少なくなることと、商品（特に惣菜や衣類）が雨に濡れて商品にならなくなるためである。また、菜市場は月曜日に攤位が減少する。その理由は、卸市場が休みであるからで、特に魚介類などの鮮度が要求される品物は入荷できないからである。零售市場が月曜日に休日となっている理由も、この理由だと考えられる。

反対に最も攤位が多くなるのは土日や祝日である。これには、2つの原因が考えられる。1つは台湾でも週休二日制が導入されており、土日が休日であることから、平日の菜市場の営業時間に買い物できない客が、土日や祝日に買い物するからである。もう1つは、攤を出す店主側にとっても、平日は会社で働き、土日に兼業で攤位をだす店主がいるからである。

2) 菜市場で使用されている攤の種類

今回、調査した攤は、その販売の方法により幾つかの種類に分類できた。そこで攤の種類を著者は次の6つに分類した。その内訳は①直置き型（直接道路に布やビニールを布き広げて販売するタイプ）、②手押し車型（台車や乳母車等）に物品を載せて販売するタイプ、③タイヤ付のテーブル型（タイヤの付いたテーブルに物品を載せて販売するタイプ）、④トラック型（トラックの荷台を利用して物品を販売するタイプ）、⑤仮設固定型（仮設のテーブルや棚を置いて販売）、⑥半店舗固定型（店舗の一部を使用して仮設のテーブルを置き販売するタイプ）である。特に⑥の半店舗固定型は、毎日菜市場の営業時間だけ設置し、午後には片づけてしまうので、午後の時間帯は空き店舗となる。また、場所にもよるが①、③、⑥の型の攤には場所代（家賃）が掛かるとのことだが、②、④、⑤は移動しているので場所代は掛からないとのことである。

今回の調査では、①～⑥のタイプ等の菜市場の開かれている時間内だけ営業している攤を調査対象としたが、零售市場内の店舗（台湾では市場内の店舗は攤位と呼ぶ）も調査範囲とした。



写真3：直置き型の攤位（シートを道路に敷いて品物を並べただけである。）

撮 影：謝君慈（2018年11月9日）



写真4：手押し車型の攤位（手押し車にコンテナを載せ、時々場所を変え販売もする。）

撮 影：謝君慈（2018年11月9日）



写真5：タイヤ付テーブル型の攤位（販売専用の台に車輪を付けている。営業中は移動しない。）

撮 影：謝君慈（2018年11月9日）



写真6：トラック型の攤位（トラックの荷台を利用し販売している。）

撮 影：謝君慈（2018年11月9日）



写真7：仮設固定型の攤位（コンテナ等を利用し見世棚を作り商品を販売する。）

撮 影：山下昭洋（2018年12月2日）



写真8：半店舗固定型の攤位（奥も同じ店舗であるが商品販売のメインは路上に突出している。）

撮 影：山下昭洋（2018年12月2日）

3) 2018年10月7日現在の菜市場における擺攤の販売品目の分類

今回、著者が大雅菜市場の擺攤の調査をおこなったのは、2018年10月7日曜日の午前10時頃である。これは、特別な催し事がない日曜日の最も攤位が多い時間を選んだためである。特別な催し事とは、例えば「端午の節句」などの台湾での伝統行事がおこなわれると、それに関連する特別な攤（端午の節句だと粽用の皮の販売）などが臨時に開設されるので、日常的な擺攤を調査するのに不都合だと判断したからである。

今回の調査から、2018年10月現在の大雅菜市場の擺攤の範囲は図10に色付けしたエリアとなり、南北は大栄街から雅環路間、東西は学府路から忠清東路間に擺攤が拡大していることがわかった。調査日に出店していた

攤位は合計328であった。攤の販売物品の分類には大村（1981）の「台湾台中市における零售市場と夜市の構造」を参照として、1：野菜、2：果物（含：甘蔗）、3：魚介類（含：乾物）、4：鶏肉（含：雛鳥・卵）、5：豚牛肉、6：杙（屋台飲食店）、7：その他の食品、8：衣類（含：靴・布）、9：その他の用品、10：閉鎖店舗の10種に分類した。

その結果、大雅菜市場の攤位における販売物品の割合は1：野菜35%、2：果物9%、3：魚介類8%、4：鶏肉4%、5：豚牛肉6%、6：杙2%、7：その他の食品19%、8：衣類11%、9：その他の用品7%、10：閉鎖店舗0%であった。野菜類が最も多く35%を占めていたが、野菜の販売方法は比較的大きな攤位では多品種の野菜を扱っていたが、小規模な攤位では単品の野菜を

販売しているのも見られた。次にその他の食品が19%の攤位を占めていた。その他の食品では、出来合いの総菜や、餅等の単品の食品を販売するなど、様々な物品を販売する攤が見られた。三番目に多かったのが衣類の11%

であった。衣類は特に零售市場南の学府路市場巷の南側に攤位が集中していた。閉鎖店舗に関しては、大雅第一零售市場内では1店のみであった。

表4：2018年10月7日の大雅菜市場のエリア別の攤における販売物品

	販売品目	①-A	①-B	①-C	②-A	②-B	③-A	③-B	③-C	④-A	④-B	④-C	④-D	⑤	⑥	⑦-A	⑦-B	⑦-C	計
1	野菜	3	3	7	9	5	11	24	1	4	9	15	6	4	8	1	5		115
2	果物		2	2		2	3	3			1	6	4	2	2		1	1	29
3	魚介類	1	1	5		3	3	3			1	1			1	3	3		25
4	鶏肉			1			2	2					1	2	1	1	1		11
5	豚牛肉			3			1		1				1	1	2	7		4	20
6	杅	1					2							1		1		2	7
7	その他の食品	4		13	5	13	3	7				1	2	1	1	3	5	5	63
8	衣類	2		8		5	1	4			3	1	1			1	1	8	35
9	その他の用品					7	2	1			1	2		1		1	5	2	22
10	閉鎖店舗															1			1
	計	11	6	39	14	35	28	44	2	4	15	26	15	12	15	19	21	22	328

作成：山下昭洋

4) 大雅菜市場の街路別にみる攤位

次に、大雅菜市場の攤位を通り別に7つのエリアに分けて、それぞれの通りの攤攤の特徴を述べていくこととする。

①大雅路甲（学府路291巷～永興路・学府路250巷交差点）

大雅路甲全体では56の攤位があった。学府路市場巷を境にして南側に客足が集中していたことから、大雅路甲は次の①～③に分けて考察することとした。

A、学府路291巷～学府路市場巷北側

このエリアには11の攤位があった。内訳はその他の食品4、野菜3、衣服2、魚1、杅1となっている。攤の種類は、第一零售市場前がタイヤ付テーブルでの販売型で、その他の場所は仮設固定型であった。杅は半店舗固定型であった。このエリアは学府路291巷の突き当り付近にある駐輪場からの客の進入口となっていてところであるが、場所が狭いために攤数は少ない。

B、永興宮門前三叉路上

ここは大雅菜市場で最も家賃（場所代）が高い場所であるが、路上であるのと狭いので攤位数も6つしか設置されていなかった。内訳は野菜3、果物2、魚1であった。攤の種類はタイヤ付テーブル型と直置き型しかなかった。これはこのエリアが路上であるため車が通る時や警察の手入れがある時には機動性が必要なためだと考えられる。また、直置き型の攤位は幅が1mにも満たないスペースでの販売であった。

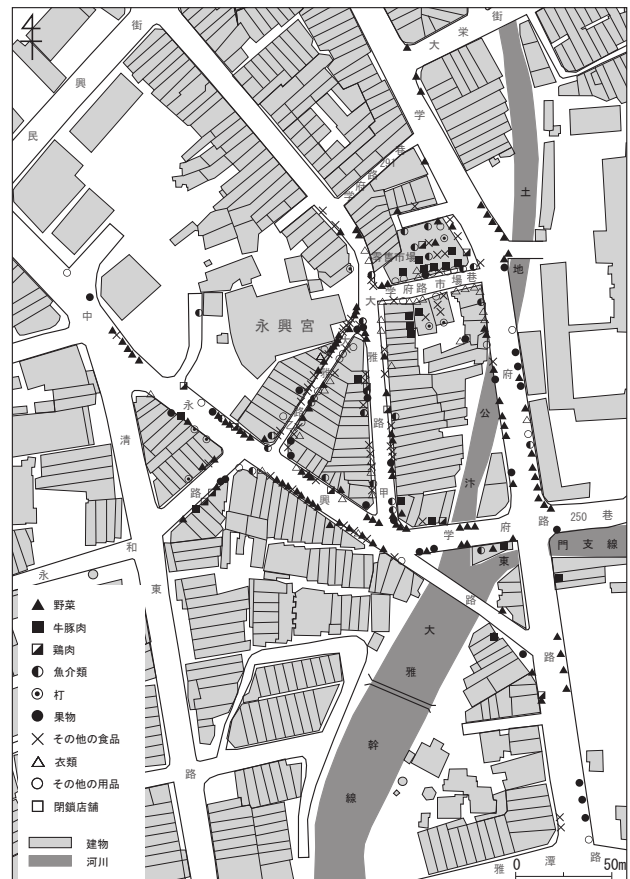


図11：2018年10月7日(日)の大雅菜市場の攤位位置図

参照：「臺中市空間地圖查詢系統」

作成：山下昭洋

C、学府路市場巷南側～永興路・学府路250巷交差点

このエリアは客が多いことと、距離も長いことため39の攤位が置かれていた。大雅路を東西に分けて分析すると、東側並びに23、西側並びに16の攤位があった。東側並び

には野菜7、その他の食品6、衣服・靴5、魚・乾物2、牛豚肉1、鶏肉1、果物1となっている。西側並びには、その他の食品7、魚3、衣服・布3、肉2、果物1となっていた。このエリアは殆どが仮設固定型である。この通りには半店舗固定型も7店見られた。

②大雅路乙（永興宮門前南側～永興路）

大雅路乙は通り全体では49の攤があった。しかし、永興宮門前南側の屏際と、その他の場所では攤位の型が違っているので分けて考察する。

A、永興宮南側門前屏際

このエリアは永興宮の屏の外側にそのほとんどが直置き型による攤を設置して野菜と食品を販売している。攤数は計14で、一つ一つの攤位も非常に狭く自分の肩幅程度の広さの攤位に物品を並べて販売している。このエリアでの販売物品は野菜9（64%）、その他の食品5（36%）となっており、この二項目しか販売していない。

B、大雅路乙（永興宮屏際以外）

大雅路乙は狭い路地となっていて、最も混雑している通りである。しかし、客のほとんどはこの道を通り抜けて大雅路甲と永興路を行き来するので攤数も35と多い。このエリアでは、惣菜の販売が目立っている。このエリアのその他の食品13はエリア内の37%を占めている。ここでは、仮設固定型と半店舗固定型の攤が設置されており、狭い路地がより狭くなっている。

③永興路（中清東路～学府路）

永興路の通り全体では、74の攤があった。永興路は永和路・大雅路乙の交差点以南と学府路交差点以南の①～③のエリアに分けて考察する。

A、中清東路～永和路・大雅路乙交差点

このエリアには28の攤が設置されていた。ここには中清東路上に、大雅菜市场で下車するためのバス停がある。また、このエリアの永興路の東側は農協や、仮の警察署（建て替えに伴い暫時ここに仮庁舎があった）があったため、一時は攤数が減少していたが、警察署の建て替えが終了したので、また、攤数が増加している。ただし、元々の攤位の持ち主が帰って来たのではなく、新たな販売者により攤位が設置された。中清路と面している地点はトラック型の攤が多いが、大雅路乙付近では直置き型の攤が多い。このエリアは攤位の背後に建物店舗が

無いので、基本的に場所代を払っていないとのことである。このエリアの攤数も野菜11で39%とトップであったが、食事を提供できる軒が2つあるのも特徴的である。

B、永和路・大雅路乙交差点～学府路250巷交差点

このエリアは大雅菜市场で攤数が44と最も多いエリアである。大雅菜市场の13%の攤がここに立地していることとなる。この攤位は道の北東側の並びは仮設固定型の攤位が多いが、道の南西側は直置き型、手押し車方の攤位が多い。このエリアは比較的新しいので、場所代を払わずに営業している者が多いとのことである、特に手押し車方は、移動しながら販売しているので、場所代は払っていない。販売品目は野菜がトップの24で、55%を占めている。この野菜販売も手押し車で近所の農家の女性が販売しているものが多い。

C、学府路250巷～学府路

ここは大雅幹線（筏子溪）に掛かる壩雅橋を南東方向に超えた場所で、橋は菜市场営業時にはバイクの違法駐輪に占拠されている。ここには2つの攤位しか立地しておらず、野菜と豚肉を取り扱っている。両方とも半店舗固定型の攤である。

④学府路

学府路は大雅菜市场の通りの中で最も長い距離を有する通りである。学府路通り全体の攤数は60であった。この通りの北側と南側は最も新しく攤が設置されているエリアである。よって、このエリアは①～④のエリアに区分して考察することとする。

A、大栄街～零售市場北側

このエリアは夜間だけ開店する店舗が立地する場所でもある。大雅の住民はここを「夜市」と呼んでいるが、厳密には夜市ではない。ここには最近、攤位が出るようになったが、ほとんどが移動式のトラック型の攤位である。この攤位では4つ総てが、野菜を販売している。

B、零售市場北側～土地公汴（学府路一号橋）

このエリアは元々、学府路が開通した時に違法な夜市が先に開かれていた場所であるが、大雅路甲に攤位が移動し縮小したとのことである。大雅国民中学へ渡る橋の北側に大きな榕樹（ガジュマル）があるが、その木の下に攤位があったとのことである。

現在は榕樹の近くに8つの攤位が並んでおり、ほとん

どが直置き型の小規模な攤位で野菜販売である。学府路の西側の攤位は半店舗設置型が多く、比較的大きな攤位で、衣類や野菜を販売している。このエリアには16の攤位がある。

C、土地公汙（学府路一号橋）～学府路250巷

土地公汙に掛かる学府路一号橋以南は新しく攤位ができた場所で、東側は大雅国民中学の塀沿いで、西側は土地公汙の川沿いとなる。このエリアには26の攤位があり、トラック型と直置き型の攤位が多い。攤の販売品目も野菜が15でこのエリアの販売品目の58%を占めている。

D、学府路250巷～雅環路

このエリアが大雅菜市場で最も新しく攤位が置かれているエリアとなる。このエリアには攤位が15ある。学府路の東側は大雅国民小学前の歩道沿いにトラック型の攤位が並んでいる。西側は建物の前にトラック型、仮設固定型、タイヤ付テーブル型の攤位が疎らに並んでいるが、最も新しい場所なので、特に西側はどの様に変化するのか注目すべき場所でもある。

⑤永和路

永和路には12の攤位がある。ここは通りも短く攤数も少ないが、販売品目は平均的で多品目である。この攤位は半店舗設置型が多い。永和路の特徴は、野菜販売の半店舗固定型の1つの攤位の女性店主がベトナム籍ということである。この店は、当初タイヤ付テーブル型の攤位で市場の中央近くで野菜を販売していたが、2010年頃に永和路に半店舗固定型の攤位を開業したとのことである。この店ではベトナムの調味料や香菜も販売しているので、ベトナム人を中心に東南アジアの出稼ぎ労働者および新住民（台湾人配偶者がいる外国籍女性・中華民国国籍を取得した外国人）が買い物に訪れていた。その結果2018年に入り、この店の正面にベトナム料理で使用する香菜を直置き型の攤位で販売する外国人（東南アジア系）の攤位ができた。また、永興路と永和路の交差点付近の永興路側にも同じような攤位ができた。この他永興路には通りの真ん中あたりの北東側にも同じような香菜を販売している東南アジア系の攤位が2017年から2018年現在にかけて出現している。

⑥学府路250巷

学府路250巷は15の攤位がある。このエリアには、土地公汙に掛かる永興橋を中心に西側の北側と東側の南側

にスレート造りの半店舗固定型というよりむしろ、零售市場の内部の様なそれ専用の攤位が設置されている。この中では零售市場のように肉類や魚介類が販売されており、小規模な零售市場の様相を呈している。永興橋上と橋西側の南側は直置き型の野菜売りの攤位が置かれている。

学府路250巷は将来的に菜市場が拡大延長する方向になる可能性がある通りである。今回の調査した菜市場とは距離が離れていたために入れなかったが、大雅国民中学の南側からそれを過ぎた場所に100mぐらい離れた間隔で300m先ぐらいまでポツンポツンと2、3の攤位があったことから、今後は菜市場の延長方向になる可能性を示唆している通りである。

⑦大雅第一零售市場内と学府路市場巷およびその南側

第一零售市場は台中市経済局が管理しているいわゆる公有市場であるので、ここでは、零售市場とその周辺と、市場通りの南側を分けて考察することとした。

A、市場構内

第一零售市場は台中市の経済局が管理している施設である。2010年に政府中央機関の経済部の「台湾省零售市場管理規則」は廃止されたが、地方自治体の経済局に管理が移行したことから、基本的にはこの規則に準じた規則で運営されていると考えられる。上記の規則では零售市場内で販売できる物品は「蔬、果、魚、肉類及其他民生用品」（野菜、果物、魚介類、肉類およびその他の日常生活用品）となっている。大雅の零售市場内でもそれに準じた物が販売されており、特に零售市場構内には豚牛肉の販売が多く構内だけで7つの攤位があった。これは構内の攤位の37%を占めている。大雅菜市場全体の豚牛肉を販売する攤位は18であるので、零售市場構内だけで全体の35%が集中していることになる。また、魚介類を販売する攤位も3つ、鶏肉販売の攤位も1つ入っているので、魚介を含め肉類を販売している攤位が目立っている。その他、台湾の他の地区の零售市場と同じ様に、菜市場に買い物にきた客や菜市場で働く攤主のために杵も1つ入っている。

B、第一零售市場周り

第一零售市場を取り囲むように小型の攤位が並んでいる。零售市場の周囲には21の攤位が並んでおり、零售市場の西側には食品を販売する攤位が5つ中に3つと多く、南側には雑貨類を販売する攤位が12中に5つと多い。

C、学府路市場巷南側

零售市場の南隣になる学府路市場巷の南側には大村（1981）が二次的増設市場構内と称する場所がある。ここには豚牛肉を販売する攤位が4つと打が2つ立地している。この内部の攤位の構成は、零售市場構内の攤位の型と販売品目と似ている。学府路市場巷通りには仮設固定型の攤位が通りに面して並んでいる。ここには11の攤位があるが、その中の7つ（64%）が衣類を販売している。

5. むすび

この論文では大雅区の人口の推移と大雅区の菜市場の形成過程と攤位の拡大を時系列に調査研究してきたが、大雅区の菜市場の形成は、清朝統治時代末もしくは日本統治時代初期の段階頃において「海口人」と呼ばれる人たちの魚介類販売の擺攤に始まったと特定できた。その後、埧雅街（大雅街）の人口増加と市街地の形成と共に、現在の大雅路（民興街～学府路291巷間）に菜市場が形成された。しかし、1959年8月の八七水災により市街地共に菜市場も一時消滅した。その後、再興した菜市場は場所を変えて永興宮門前周辺から始まった。だが、大雅区の人口の増加と共に菜市場の拡大と警察による取締との「いたちごっこ」が開始されるようになる。この現状の改善のため、1976年に行政より「大雅第一零售市場」が建設された。だが結局は零售市場だけでは菜市場の攤が入りきれなかったことや、家賃の支払いなどで零售市場から菜市場は溢れだし、近隣の街路へ拡大していった。

この菜市場の拡大の時期は、大雅区の人口が最も急増した時期（1976～1996年）と合致している。このことから、著者は大雅区、特に大雅里の人口の増加が菜市場の拡大に影響を与えたと今回の調査で証明できたと考えている。特に大雅区の菜市場は区の中心部に位置しており、人口増加と共に菜市場が拡大するといった関係の一つのモデルとすることができた。よって今後は台湾の地方都市における市街地形成と菜市場の立地の関係性をも含めて引き続き調査していくこととする。

また、今回の菜市場の現状の調査では、2018年10月現在の大雅菜市場の範囲と、販売物品の分類も実施したが、大雅菜市場を総体的に捉えてみると、2018年現在に、攤数および客足が最も多かった場所は、学府路市場巷と大雅路甲・乙と永興街の三角地帯であった。この場所の特徴は半店舗固定型や仮設固定型の攤位が多い場所で、攤位が固定されている場所である。それ以外の場所では特

に学府路や永興路の中清東路付近ではトラック型の攤位が目立ち、攤位が固定されていなかった。これは、攤位が流動的であることを意味しており、今後は固定式へ変わっていくのか、消失してしまうのか、今後も追って調査する必要がある。

また、大雅菜市場の販売品目の特徴としては、野菜販売の攤位が35%とトップであったが、野菜を売っている攤位は特にさまざまなタイプのものがあつた。その中でも最も数が多かったのは直置き型であるが、永興路の南西側や大雅路甲との交差点で多かったのは手押し車型の攤位であった。これはおそらく大雅市街地近郊の農業もしくは家庭菜園から直接収穫した作物（旬の野菜中心）を販売している攤位だと考えられる。この直置き型と手押し車型の攤位は最も流動的で、雨の日や収穫物が少ない日には攤が出ることはない。しかも、このタイプの攤の攤主は高齢者が多いので、今後、どの様に変化していくのかも今後の課題の一つである。

最後に、現在台湾では少子高齢化が国の社会問題の一つとなっている。大雅区の人口増加数も2000年以降はやや伸び悩んでおり、特に中心市街地のある大雅里では人口の減少も見られた。そこで、果たして現在の大雅菜市場が、今後は拡大していくのか、縮小するのか追って調査していくこととする。

注

- 1) 菜市場とは台湾での朝市の一般的な呼び方である。菜とは、野菜や肉類などの料理のおかずを作るための食材の意味がある。これ以外に、午後から夕方まで開く市を「黄昏市場」と呼び、食事や娯楽を提供している夕方から深夜にかけて開かれているものは「夜市」と呼ばれている。
- 2) 台湾の地方自治の行政単位は、国の直轄市、県の二種類があり、直轄市の下に区、県の下に県轄市、郷、鎮となる。
- 3) アメリカの経済学者ライリーが1929年に実証的に発見した法則で、商圏の分岐点を計算するための法則である。
- 4) 大村肇（1981）：台湾台中市における零售市場と夜市の構造。立正大学文学部論叢。71号。1-29。
- 5) 植根法律網：<http://www.rootlaw.com.tw/index.aspx> 最終閲覧日2018年12月3日
- 6) 公有市場とは自治体が管理する市場で、私有市場とは民間が管理する市場のことであるが、私有市場は決まった呼び名がなく民営市場や民有市場などの呼び方がある。
- 7) 江素卿（2008）：『台中縣大雅郷之人口成長與聚落發展』。国立彰化師範大学修士論文。
- 8) 1920年初めて民間人から任官させた第8代台湾総督田健次郎はそれまでの軍人総督とは違い、台湾に「内地延長主義」を導入し、行政、司法等に日本内地と同じ、もしくは

それに準ずる方法での統治を目指した。地方官官制改正もその一つで、地方自治の方法を日本式に変え、日本では使用されていない漢字の地名や、難読地名を日本式に改めた。本論文の研究対象地域の、「埧雅」も「大雅」となった。

- 9) 現在の忠義区の所在する土地は軍用地が立地しており、国共内戦に敗れた国民党が中国大陆から難民を連れて移住してきたため、軍用地の近郊や、戦前に日本人が居住していた家屋を接収して居住させた。これを「眷村」もしくは「新村」と呼び、台湾各地に立地している。
- 10) 「十大建設」とは1973年に蔣経国が打ち立てた大規模インフラ整備の6ヶ年計画で、外交的に追い詰められていた台湾が危機を乗り越えるために打ち立てた工業化への政策である。十大とは桃園国際空港建設・台湾鉄路管理局北廻線の建設・鉄路電氣化・台中港建設・蘇澳港建設・原発建設・中山高速道路の建設・造船業の推進・鉄工業の推進・石油化学工業の推進であった。
- 11) 『家族で台湾へ海外移住』「【2018年】台湾の不動産価格はバブル崩壊寸前!? 一進一退の状況」<https://clubtaiwan.net/blog/> (最終閲覧日2019年1月7日)
- 12) 堡とは清朝時代(雍正年間から)に使用されていた自治単位である。10戸を1甲、10甲を1保とする保甲制から来たもので、後に堡の字を当てるようになった。
- 13) 江(2008)によると1956年のデータは大雅郷戸政事務所においてもデータ欠損となっている。1946年から10年間隔となっている理由を江は記していないが、おそらく戦後の人口調査が始まった1946年に合わせての10年間隔だと考えられる。
- 14) 「台中市人口統計」<http://demographics.taichung.gov.tw/Demographic/Web/Demographic.aspx> (最終閲覧日2018年11月24日)
- 15) 内閣府「世界各国の出生率」<https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/data/sekai-shusshou.html> (最終閲覧日2019年1月7日)
- 16) 台湾歴史學會HP：<http://www.twhistory.org.tw/index.html> (最終閲覧日2018年12月9日)
- 17) 許文彬(1998)：『台中縣豐原區古蹟巡禮暨史料彙編』。台中縣古風游藝學會。p159

文献

日本語文献

- 木村雄人・伊藤裕久・栢木まどか・村田真理子(2011)：日本統治期における台湾公設市場の空間構成と街区形成過程に関する復原的研究。都市計画論文集。46巻3号。721-726。
大村肇(1981)：台湾台中市における零售市場と夜市の構造。立正大学文学部論叢。71号。1-29。
臨時台湾戸口調査部(1907~1934)：台湾現住人口統計(1905年版~1933年版)。台湾総督府戸口調査部。
台湾事務局(1898)：台湾事情一斑。台湾事務局。
台湾総督官房調査課(1935~1944)：台湾常住戸口統計(1934年版~1942年版)。台湾総督官房調査課。
台湾総督府総督官房文書課：台湾現住戸口統計。台湾総督府総督官房文書課 1903

中国語文献

- 陳炎正主編(1995)：『大雅郷志』。台中県大雅郷公所。
江素卿(2008)：『台中縣大雅郷之人口成長與聚落發展』。国立彰化師範大学修士論文。
林心穎(2006)：『大雅郷土地使用轉換與台中市都市化關係之研究』。国立彰化師範大学修士論文。
吳呈賢(2014)：『既有市區道路景觀更新與重塑之研究—以大雅區永興宮周邊商區道路環境改善為例』。逢甲大学修士論文。
許文彬(1998)：『台中縣豐原區古蹟巡禮暨史料彙編』。台中縣古風游藝學會。
楊宏章(2000)：『大雅郷農會 八十週年特刊』。大雅郷農會企劃稽核股。
張東閣主編(1995)：『永興宮志』。永興宮管理委員會。
張東閣主編(2000)：『看咱古早的大雅』。永興宮。
台中市人口統計：http://demographics.taichung.gov.tw/Demographic/Web/Demographic_18.aspx (最終閲覧日2018年12月3日)
台中市空間地圖查詢系統：<https://gismap.taichung.gov.tw/ADDRESS/begin.CFM> (最終閲覧日2018年12月3日)
台湾歴史學會：<http://www.twhistory.org.tw/index.html> (最終閲覧日2018年12月9日)
植根法律網：<http://www.rootlaw.com.tw/index.aspx> (最終閲覧日2018年12月3日)

A Development of the Daily Food Market in Daya District of Taichung City in Taiwan

YAMASHITA Akihiro*

* Assistant Professor , Japanese Department, Providence university. Visiting researcher, Rissho university

Key words: Taiwan Taichung City, Daya district, Public retail market, Daily Food market, Sales booth